

## 【熊本S. J. C. D. 例会 抄録】

**演 題** 歯科医療に対し強い不信感をもつ患者に対し、  
矯正医との連携にて修復治療を行ったケース

**演者名** 山部英則

**日 付** 2006年11月28日

### keywords

1. 歯科医療に対する不信感
2. インターディシプリナリー
3. 埋伏歯の挺出
4. インプラント
5. ラポールの確立

### 抄 録

患者は2001年8月初診、当時25歳独身の女性で、左上下臼歯の痛みを主訴として来院した。

主訴であった部位の治療が終了した後、右上53の歯列不正と遊離端欠損をどうにかして欲しいという希望があった。中学時代から十数年矯正をしていたが、結局、臼歯部を喪失し、右上53の歯列不正も残っており、20歳代にしてPDを装着され、それまでに多額の治療費を払っており、最後には欠損臼歯部にインプラントを勧められた為、不信感を抱き治療を中断したとの事であった。

5321 | 123567  
765321 | 123567

欠損は右上の76であった為、一番シンプルかつベストな治療法は53を近心移動させ、臼歯部にインプラントであったが、初診当時は心理的にも経済的にも、とても受け入れられなかった。そこで矯正医に埋伏している右上8を挺出させブリッジの支台として使えないか相談し、トライしてみようということになり、患者にカウンセリングした結果、同意が得られたので治療を開始した。

患者は初診当時25歳独身女性で途中結婚、二度の出産を経て現在に至る。歯科医療に強い不信感を持たれていた為、許容できる範囲で患者主導の治療を進めてきた。さらに、途中で結婚、二度の出産等のイベントにより治療の中断もあり、結局、初診から約5年経過してしまっただが、その間、矯正医との協力によって（埋伏歯である8を矯正挺出させる等して）歯科医療に対する不信感を取り除き、ようやく最終補綴物の装着にこぎつけた。

今回供覧させて頂く症例は、ファイナルのレントゲンだけみれば1年位で終わりそうな症例ではありますが、まわり道をしたからこそ辿り着いたゴールでもあると思っています。患者とのラポールを確立し、信頼関係を得るために期間が必要な場合もあることを教えられた症例でもあり、埋伏歯を挺出させて利用した（現在であれば矯正用インプラントが可能であったかもしれないが）自分としては初のチャレンジケースでもありますので、プレゼンテーションさせていただきます。